

フランス柔道と武道理念に関連する研究

濱田 初幸

伝統武道スポーツ文化系 准教授(柔道)

国際柔道連盟におけるフランス柔道

国際柔道連盟(International Judo Federation 以下 IJF)は、1951年7月に南米アルゼンチンの加盟を契機にイギリス、フランスなどを中心とした欧州柔道連盟を改称し発足したが、国際的な機関として機能するものではなかった。日本のIJF加盟は、1952年12月と後発になったが、講道館館長・嘉納履正がIJF初代会長に就任すると共に、IJFは四大洲19カ国によって構成され、正式に国際的機関として産声を挙げた。

半世紀が経過した現在、IJFには199カ国・地域が加盟している。その中でも多くの登録人口を有し、「世界の柔道大国」と言われているのがフランスである。フランス柔道連盟(FÉDÉRATION FRANÇAISE DE JUDO, JUJITSU, KENDO ET DISCIPLINES ASSOCIÉES 以下 FFJDA)の指導理念、選手強化システム、指導者育成システムを考察することが、日本において低迷している柔道普及、発展及び激動する国際化の渦中にある日本柔道に示唆を与えてくれるものと捉えている。

1. FFJDA が取り入れる武道理念と日本人柔道家の貢献

FFJDAは、指導理念として青少年を対象にコードモラルを定めている。柔道は「教育的価値、効果の高いスポーツ」であるとして、他のスポーツとの違いをアピールしながら普及発展に努めている。モラルの普及活動には、漢字、フランス語の両方で書かれたコードモラルに関する語句を道場に設置することや、新渡戸稲造著『武士道』から抜粋された「礼儀」「謙虚」「尊敬」「誠実」「勇気」「自制」「友情」「名誉」を用い、日本の美德とされている文言を引用し、日本の伝統文化を継承する方策も取り入れている。

さらにFFJDAが手渡す表彰状、許可書には嘉納治五郎師範の着物姿の遺影や、柔道理念である「精力善用」、「自他融和共栄」の文言がプリントされている。フランスに存在する多くの柔道場の正面には同様の写真、文言が掲示され、それらに対して入退場の際に礼を行うよう指導している。

2008年9月、全てのクラブに送付された子供向け「試合者の心得」を示したポスターには、礼法に関する文言が6コマの漫画中に明記されている(以下抜粋、「計量の際は係員に挨拶して敬意を払う」、「対戦相手には正しく礼をして敬意を払う」「試合後は結果にかかわらず正しく礼をする」)。(図1)

FFJDAに登録した者には、競技者登録カード(柔道パスポート)が配付されている。青少年の持つパスポートには人気漫画のキャラクター(ワザアリックス)を用いた8コマの漫画が描かれ、前述の徳目に相当した行為やレベルに達成したと指導者が評価したなら、「よくがんばった」とカラーシールが手渡され、パスポートに貼り付ける方策を講じ、礼儀や人間力の向上も大切な指導法として取り扱っている。これらの方策により道徳心の涵養、興味関心を喚起し継続性を持たせている。日本の武道精神を享受し、嘉納の柔道理念を重用し継承していることがフランス国民に受容され、FFJDA普及発展の大きな要因に繋がっているものと推察する。

FFJDAがこれほどまでに柔道大国に成長した背景に、多大なる尽力を持って貢献した日本人柔道家の存在を忘れてはならない。その代表的人物が「川石酒造之助(かわいしみきのすけ・1899-1969年)」であ



る。1935年に渡仏した川石の考案した指導方法・メソッドK(川石メソッド)は、現在でも昇段審査会や指導教本として活用されている。川石はフランス柔道の礎を築き上げ「フランス柔道の父」と呼ばれている人物である。

また、1950年に川石によって招聘され、渡仏した栗津正蔵九段(1923年生)もフランス柔道界に貢献している人物である。栗津は1957年からFFJDAの指導に関わり、1964年の東京オリンピックではフランス代表コーチを務めるなど、フランスを代表する指導者として現在も活躍中である。フランス講道館とも言えるINJ(L'Institut National du Judo フランス柔道研究所・2001年創設)には、栗津の冠名を付した栗津道場が設けられ、パリの名門スポーツクラブ・レーシングクラブ内の道場にも栗津道場と命名されるなど、栗津の偉大さを知ることができる。

栗津は、現在でもシンボルの存在であり、偉大な柔道家として尊敬と信頼を享受し、多くのフランス柔道家から愛されている。基礎を築き上げた川石の後継者として栗津の存在なくして、フランス柔道は花開くことはなかったと言っても過言ではない。1999年、栗津はその功績が認められ、フランス政府からレジオン・ドヌール勲賞(シュヴァリエ)が贈られた。

2. 選手強化システム

フランスは、国家レベルでスポーツ強化策を実施している。オリンピック種目のフランス代表選手の多くは、INSEP(L'Institut National du Sport et de l'Education Physique 国立スポーツ体育研究所)に召集され、整備された環境下でトレーニングに励んでいる。INSEPは俗に「チャンピオン製造所」と呼ばれ、フランススポーツの頂点に君臨する最重要強化センターである。

2006年、最高拠点であるINSEPに次いでFFJDA独自の柔道場INJ(L'Institut National du Judo フランス柔道研究所)内に、次世代強化選手を対象にしたINEF(L'Institut National d'Entraînement et de Formation 国立トレーニング育成センター)が新設された。さらに各地方に青少年を対象とした年代別の柔道強化拠点も設置され、中央集権化体制を図っている。

地方強化拠点は、「ポール・フランス Pôles France」, 「ポール・エスポワール Pôles Espoirs」, 「クラス・デパルトゥマンタル Classes Departementales」と呼ばれ、若い世代を対象にした機関である。これらの選手強化システムの基盤を支えているのが登録数約5500団体を有する各県、各市町村に存在する柔道クラブである。フランスは、6階層からなるピラミッド型強化をシステム化し、底辺層からトップ層まで一環強化体制を構築している(図2.表1)。

3. 指導者資格制度

FFJDAの特徴的な事例として、フランス独自の指導者資格認定制度と認定試験が挙げられる。フランスでは、通称ブルベダ(Brevet d'Etat d'Educateur Sportif 以下BEES)と呼ばれるこの国家試験を受験し、ディプロム(資格認定証明書)を取得しなければ、柔道指導を行うことは法的に禁止されている。

1955年、柔道指導者は国家資格が必要であるとの法案が定められ、その後1972年に整備されたこの国家資格は、3階層のレベル(表2)に分類されている。

4. まとめ

柔道登録人口、国際大会における競技成績、運営方法、指導方針など今日におけるFFJDAの活動、躍進振りは、柔道創始国である我が国に対しても、多くの示唆を与えてくれるものである。武道精神の再認

識、創始者嘉納思想への原点回帰日本、柔道を世界に広めた多くの先人たちを範とする、世界の柔道家から尊敬される国際的素養を有する継承者育成も大きな課題である。

フランス柔道の発展の要因の一つには、時代の流れを正確に掌握し、それに対応する柔軟な思考、臨機応変な対策を迅速に構築し実行したことが考えられる。グローバル化が加速し、留まることを知らないかのように変動していく柔道界にあって、我々創始国日本人の果たす役割はまだまだ重要である。世界のリーダーとしての役割や働きを果たすことは、国際貢献にも寄与するものである。日本柔道の発展的方向性を探るためにフランス柔道を研究することは、柔道に関わる指導者にとって意義あるものと捉えている。



図1. FFJDA 礼法（青少年向け）ポスター

表1. フランス柔道選手強化施設：対象年齢と施設数

強化機関	対象年齢	施設数（フランス国内）
INSEP	年齢制限なし	1箇所
INEF	18～23歳	1箇所
ポールフランス	17歳以上	4箇所
ポールエスポワール	13～16歳	26箇所
クラス・デパルトゥマンタル	11～13歳	40箇所
クラブ	年齢制限なし	5500箇所

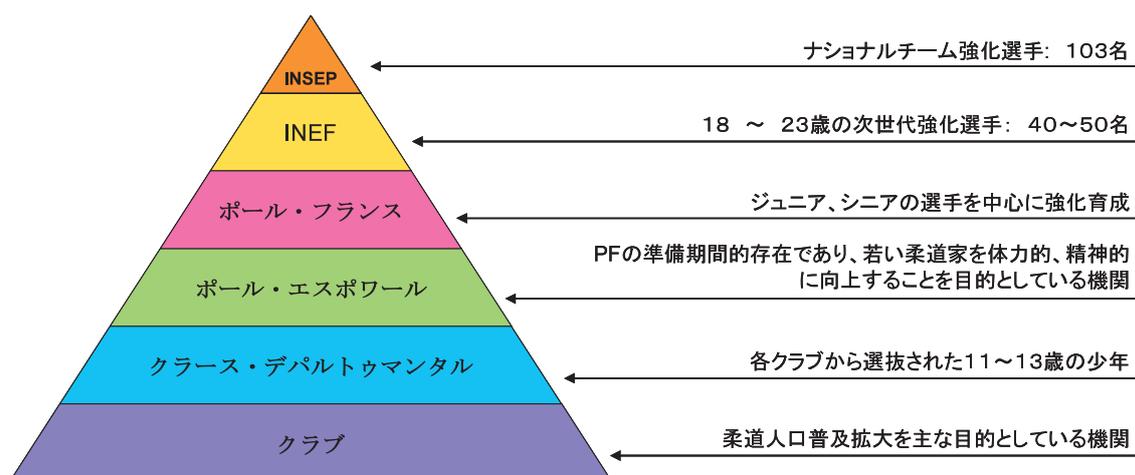


図2. フランス柔道選手強化システム

表2. FFJDA 指導者資格制度：国家資格ブルベデタ

ブルベデタ	受験資格	資格保有者の活動内容
BEES 1級	18歳以上で2段以上の取得者	教育・組織（編成）基礎体力作り、スポーツ活動の運営各県やクラブでの指導
BEES 2級	BEES1級を取得してから2年以上経過しており、3段以上を取得している者	管理職として技術の改良教育や訓練の計画、運営を行うレジョン、インターレジョン、国家レベルでの指導
BEES 3級	BEES2級を取得してから4年以上経過している者	鑑定や検索（研究）業務ナショナルレベルや国際大会レベルの指導

参考文献

- 1) ミッシェル・ブルース 東西の出会いーフランス柔道の秘密ー 柔道教育ソリダリティー 第二回 講演会 講演録 2008
- 2) 濱田初幸 柔道大国・フランスの実態を探る 鹿屋体育大学学術研究紀要 第34号 2006
- 3) 上村春樹 藤田真郎 I J F 総会報告 柔道 78(11) pp.57-61 講道館
- 4) 吉田郁子 世界にかけた七色の帯 駿河台出版社 2004
- 5) 柔道大辞典 監修 嘉納行光 アテネ書房 1999
- 6) 渡邊昌史 柔道年表 柔道科学研究 第13号 2008 pp.28-39 (財)全日本柔道連盟強化委員会科学研究部

